様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 2 日現在

機関番号：32621
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520303
研究課題名（和文）　共和国の思想と文学　－　他者との出会い

研究課題名（英文）　Idea of the republic and literature - meet with others

研究代表者
水林　章（MIZUBAYASHI AKIRA）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：80183630

研究成果の概要（和文）：「共和国の思想と文学 – 他者との出会い」を主題とする研究過程で，フランス啓蒙主義時代の文学の精力的な再読をおこなうと同時に，この主題に関係の深い現代フランス文学作品であるダニエル・ペナックの『学校の悲しみ』の翻訳をおこない，さらには，研究の一部をフランスのガリマール書店より刊行された Une langue venue d’ailleurs にまとめることができた．

研究成果の概要（英文）：I could read again many works of the literature of enlightenment. I translated *Chagrin d’école* of Daniel Pennac, a work deeply in relation to my research topic ： “The thought of the republic ： meeting with others”. I could, in addition, published a work in french at Gallimard in which some aspects of my reflections on this topic are registered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	100,000	30,000	130,000
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：フランス文学，フランス近代思想
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：共和国，教育，公共世界，個人，ルソー，自律，市民，人権宣言

１．研究開始当初の背景

2005 年から 2007 年にかけてみすず書房より上梓した 3 部作（『『カンディード』〈戦争〉を前にした青年』，『思想としての〈共和国〉– 日本のデモクラシーのために』，『モーツァルト《フィガロの結婚》読解 – 暗闇のなかの共和国』で前景化した「共和国 république, res publica」の主題をさらに深化させるべく，主として 18 世紀文学の主要な作品の再読・再検討を経て，近代西欧（フランス）における公共的世界の形成とその存立様式を考察すると同時に，日本における国家と公共世界，〈他者〉の問題，さらには公共世界構築のかなめともいうべき「教育」のあり方を問いたいという気持ちが強く存在した．というのも，上記 3 部作の根底に通奏低音のように流れている考え方でもあるのだが，とりわけ 1990 年代以降の日本において，いわゆるグローバル化にともなう新自由主義の圧倒的な威力によって，公共的世界の脆弱化，公共の力にゆだねられ，守られてきた医療や教育といった分野の諸制度がなし崩し的に崩壊ないし弱体化しつつある姿をまのあたりにして，あ

らためて公共なるもの res publica＝共和国 république の故郷としての近・現代フランスを生み出したフランス古典主義・啓蒙主義時代の思想と文学をあらためて読み返す必要性を痛感するようになったのである．

２．研究の目的

今日，この日本に生きる者にとって，フランス文学・思想（とりわけ，フランス古典主義時代・啓蒙主義時代の文学・思想）の研究にたずさわることの意味は何か．なぜ，この地でフランス語を学び，フランス文学・思想，なかんずくフランス啓蒙にいたるユマニスムの伝統を形成する文学・思想を研究するのか．その目的は何か．

わたしの今回の研究，いや今回だけでなく，わたしの試みるすべての研究・知的営み（それは研究論文の形をとることもあれば，翻訳の形をとることもあれば，エッセイの形をとることもあれば，フランス語による創作的な文章表現という形をとることもあれば，あるいはまた，シナリオ執筆をとおして映画制作への協力という形をとることもある）の根底には，この本源的ともいえる問いがひそんでいる．なぜ，今，啓蒙なのか．それはこの国は言葉のもっとも深い意味において，啓蒙を経験することなく，ということは真の意味で「近代」を経験することなくという意味に等しいであろうが，今日のポストモダン，あるいはスーパーモダンの時代に立ち至っているからである．

その点，フランスは，ルネサンスから啓蒙の世紀をへて，その経験に根ざして，フランス革命という壮大な政治・文化革命を実現し，結果として「共和国」という独特の政治文化形態，共生の様式を生み出した．今回の研究の目的は，主として 18 世紀・啓蒙の時代を画する文学作品のいくつかの精緻な再読を通じて，多種多様な，したがって本来の自然のままではとりかえしのつかない戦争状態に逢着するほかはない個人たちが，共和国という共同世界の内実を，つねに反転しうる自己＝他者としてかたちづくっている様子を，文学に固有な表現の検討をとおして明らかにすることであった．

３．研究の方法

フランス的な共同世界の構想としての「共和国」という政治的形象が研究の主要な対象であるからには，この主題にかんする現代の先鋭的な考察にふれることがまず肝要であると思われ，ドミニク・シュナペール，パトリック・ヴェイユ，ジェラール・ノワリエルといった研究者たちの著作の消化・吸収に努めた．とりわけ，ドミニク・シュナペールの一連の著作には大きな示唆を受けたこと期しておきたい．

また，18 世紀・啓蒙時代の著作の再訪も必須の作業となった．比較の対象として，啓蒙に先行する 17 世紀古典主義時代と啓蒙に後続する 19 世紀中葉までの作品を視野に収めたことも付け加えておかなければならない．研究途上で視野に入ってきた作品群を期してく．

【17 世紀】
○モリエール『人間嫌い』,『ドン・ジュアン』
○ラ・ブリュイエール『レ・カラクテール』
○ラファイエット夫人『クレーヴの奥方』
【18 世紀】
○ルソー『人間不平等起源論』,『社会契約論』,『言語起源論』,『ダランベールへの手紙』,『告白』,『新エロイーズ』,『エミール』,『孤独な散歩者の夢想』
○ディドロ『ラモーの甥』
○ヴォルテール『カンディード』,『アンジェニュ』
【19 世紀】
○スタンダール『赤と黒』,『アルマンス』
○バルザック『三十女』,『フェラギュス』
○ボードレール『パリの憂愁』

以上の文学作品を再訪するにあたって，採用した視点は何かといえば，それは，作品に描かれる「個人」とその「個人」が埋め込まれている社会ないし共同体（それもさまざまなレベルの共同体 communauté）との関係がどのように描かれているかということにつきる．わたしは，すでに，2005 年の著作『『カンディード』〈戦争〉を前にした青年』において，主人公カンディードが，他の登場人物との関係にといて，どのような「個人」として描かれているか，その小説内における進化と変容を追う作業をおこなったが，これと同様の作業を，それぞれの作品にふさわしい視点を採用しつつ，試みようと思ったわけである．

４．研究成果

膨大な作品群の再読・再訪はなかなか骨の折れる作業であった．再読の作業を最新の研究成果を参照する（とはいっても，必ずしも実り多い体験ではないのだが）と同時に，フランスの研究者や作家等との議論・意見交換をおこなうことにも精力的に動いた．その結果，当初は思っても見なかった視界が開けることしばしばであった．

その思っても見なかった視界のひとつに，

現代フランスを代表する作家の一人であるダニエル・ペナック氏との出会いがある．氏はもと中学・高校のフランス語教師であり，実際に四半世紀にわたって，教室で子供たちにフランス語（そしてフランス文学）を教えた経験を持つ．その氏が，みずからの劣等生経験も含めて，フランス共和国における「学校」と「教育」について，綴った書物『学校の悲しみ』に出会ったのである．作家本人と「共和国」「学校」「教育」といったテーマのまわりを周遊・議論しているうちに，2007 年度のルノドー賞に輝いたこの小説的エセーをわたしが日本語に翻訳することになり，研究に傾ける労力のかなりの部分をこの書物の日本語訳実現に傾けることになった．『学校の悲しみ』はフランスでは非常に大きな反響を呼び，一大ベストセラーになった．フランスと日本では教育システムが根本的に異なるうえ，社会における教育の位置が同じではないから，同様の反響は望むべくもないが，しかし，教育関係者をはじめとして，この本のなかに現代日本の教育を問うきっかけを見いだしている読者が少なからずいることも確かだろう．この翻訳には，詳細な注と異例に長い「あとがき」を付したが，これは広い意味で，本研究がもたらした産物である．

『学校の悲しみ』は自伝と小説という衣装をまとった思索の書と言うことができる．思索の対象は，共和国というシステムのなかで，それを根底から支えるものとして認識されている学校教育制度とその制度のなかにおけるフランス語教育（副次的には歴史教育，さらには哲学教育）である．この書物は，ペナック氏が受けた授業と彼自身が教師として実際におこなった授業にかんするさまざまなエピソードを介して，教育という一つの言葉でくくられてしまう行為が，実は，言語と文化を異にする他国の環境においては，まったく違った相貌のもとに現れることを鮮明に浮かび上がらせている．実際，共和国の市民を育成すること，すなわち教師に頼ることなくみずからの理性を批判的に行使することのできる自律的個人（それこそが市民である）を育成することが教育にほかならないと考える共和国における教育は，そのような前提を共有しているとは思われない日本のそれとは大きくかけ離れている．フランスでは，文化系教育の主眼が文学と哲学の古典と向き合うこと，テクストとの真の出会いをいかに実現するかにおかれているからである．『学校の悲しみ』には，ペナック氏が実際に教室で用いた文学的古典からの引用（アルフォンス・ドーデ，ラ・ブリュイエール，バンジャマン・コンスタン，ルソー等）が散りばめられており，その様子の一端をうかがい知ることができる点も貴重である．とくに，「あとがき」でも引用した，古典的テクストを音読することの重要性を説く一節には，豊穣なメタファーの積み重ねによって，子供たちがどのようにして討議空間としての共和国を根底からささえている共通言語としてのフランス語という歴史貫通的財産にアクセスするのかという問題にかんするペナック氏の基本的な姿勢が示されていて，興味深い．

さらに，『学校の悲しみ』のもう一つの注目すべき点は，共和国に固有な教育思想（自律的市民を育てるという思想）が近年の新自由主義的グローバリエーションという世界的文脈のなかで，消費者による市民の圧殺というかたちをとる猛烈な攻撃にさらされているという事実に深い洞察の視線を投げかけていることだろう．『学校の悲しみ』は，小説的・自伝的物語を読む喜びを超えたところで，共和国とは何か，共和国における教育とは何だったのか，そしてその教育が，現在，なにゆえに，どのようなかたちで危機に瀕しているのかを示す深い思索の書ともなっているのである．

思っても見なかった視界にはもう一つの出会いがあったことを記しておかなければならない．これも本研究をたずさえ，足繁くフランスを訪れていなければ起こりえなかった出会いである．ダニエル・ペナックを介して，なんと現代フランスにおける精神分析学の巨匠の一人，J. B. ポンタリスの知遇にめぐまれたのである．ポンタリス氏との「共和国「教育」「学校」をめぐる会話は，「共和国」を「共和国」の本質的な姿としての討論空間として成り立たせるものとしての「言語」すなわちフランス語それ自体を問題にする視点にわたしを導いた．そして，そこから，わたしは，わたし自身にとって，フランス語とはどのような言語であり，共和国の言語としてのフランス語を外国人であるわたしが学ぶ意味とは何なのかという問いを発するにいたった．そのようなわたしの思索をかたわらで見ていたポンタリス氏が，わたしにまさに共和国の言語としてのフランス語と自分との距離を測るような一書をまとめてはどうかという提案を寄せてきたときには，正直言って大いに驚いたが，まさにこの提案によって，老舗ガリマール書店から研究と思索の成果を発表するという，日本人にとっては皆無ともいうべき僥倖に恵まれたのである．2011 年 1 月 13 日に上梓された *Une langue venue d'ailleurs* はこうして生まれた．当初の研究計画ではまったく予想さえていなかったことであるが，これもまた，本研究のコンテクストのなかで生まれた成果にほかならない．

Une langue venue d'ailleurs もまた『学校の悲しみ』と同じように，自伝と小説の言説のなかに，研究的エセーの言語が埋め込まれている作品である．日本人にとって，フランス

語という他者の言語を習得することの意味は何かという根源的な問いを背景に，共和国思想の源流とも言うべきヨーロッパ啓蒙の究極的な思想家・表現者としてのジャン＝ジャック・ルソーとヴォルフガング＝アマデウス・モーツァルトを繰り返し登場させている．このふたりの姿は，ほとんど，ヴァーグナーのオペラにおけるライトモチーフに近い機能をはたしていると言ってもよい．ルソーの作品群，とりわけ『学問・芸術論』,『人間不平等起源論』,『社会契約論』,『ダランベールへの手紙』,『エミール』,『新エロイーズ』,『告白』,『孤独な散歩者の夢想』を読み解く行為は，ルソーにおける共和国＝レス・プブリカを担う意志的な個人を可能にする人間観を学び取る過程にほかならないということ，そしてまた，ザルツブルグの天才作曲家の音楽，とりわけオペラ『フィガロの結婚』における彼の奇跡的とも言える達成を理解することは，フランス文学史に燦然と輝くボーマルシェの戯曲『フィガロの結婚』を下敷きとしつつ，モーツァルトにおける「共和国」への意志を感得することにあることを暗に示したつもりである．

ルソーにおけるレス・プブリカの担い手としての個人を支える人間観がもっともよく現れているのは，『人間不平等起源論』の次の一節であろう．「いかなる動物も，感覚器官をもっているからには観念を持っている．ある程度まではその観念を組み合わせさえする．だからこの点に関し，人間と禽獣との差異は程度の問題に過ぎない．哲学者たちのなかにさえ，ある人間とある人間の違いは，ある人間とある動物の違いよりも大きいと主張した人たちがいるではないか．それゆえ，諸々の動物のなかにおける人間という種の特殊性は，知性というよりはむしろ自由な行為者としての特質なのである．自然はあらゆる動物に命令し，そして禽獣は服従する．人間も同じ圧力を感じる．しかし人間は，同意するも拒否するも己の自由であることを知っている．そして何よりもこの自由の意識のなかにこそ，人間の魂の霊性が現れているのだ．」(『人間不平等起源論』第一部)

他方，モーツァルトの『フィガロの結婚』において，このようなルソー的な意味での自由，「自然」によって非選択的に与えられた条件からみずからの意志によって飛翔しようとする人間に固有の能力をもっとも鮮明に，そしてもっとも模範的に示しているのは，スザンナにほかならない．*Une langue venue d'ailleurs* がスザンナへのオマージュとも言える内容になっているのは，そのためである．

Une langue venue d'ailleurs は 2011 年 1 月 13 日の上梓以来，フランスの有力各紙によって絶賛とも言える評価を得たことは望外の喜びであった．まず，発売前の 1 月 6 日には，Le Monde のロベール・ソレ氏によって「素晴らしい書物」として紹介された．その後，Le Nouvel Observateur のジェローム・ガルサン氏，Télérama のマリーヌ・ランドロ氏，La Croix のパトリック・ケシシアン氏，La Quinzaine Littéraire のティフェーヌ・サモワイヨ氏，Le Magazine littéraire のノエミ・シュードル氏，Le Figaro littéraire のティエリー・クレルモン氏によって，紹介された．とりわけ，著者として興味深いのは，ティフェーヌ・サモワイヨ氏とティエリー・クレルモン氏の文章で，一日本人がフランス語でみずからを表現する姿を，ベケット，シオラン，クンデラといった現代フランスの大作家たちの系譜のなかに位置づけているのが印象に残った．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 2 件）

1. MIZUBYASHI Akira, *Une langue venue d'ailleurs*, collection « L'un et l'autre » dirigée par J.B. PONTALIS, Gallimard, 2011. 280 pages.

2. ダニエル・ペナック『学校の悲しみ』（水林章訳）みすず書房，2009．376 頁．

〔その他〕
ホームページ等

http://web.mac.com/akira_mizubayashi/humanites_france/Bienvenue_!.html

６．研究組織

(1)研究代表者
水林　章　（MIZUBAYASHI AKIRA）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：80183630